2026 年 度 入 学 試 験 問 題

国　　語

（試験時間　14：50〜15：50　60 分）

1．解答用紙には，記述解答用紙とマーク解答用紙の 2 種類があります。

2．解答は，必ず解答欄の枠内に記入もしくはマークしてください。解答欄以外への記入およびマークはすべて無効となります。特に，記述解答用紙の採点欄に解答を記入しないよう，注意してください。

3．解答は，ＨＢの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，一度マークした箇所を修正する場合，しっかりと消してください。消し残りがあると，解答が無効となることがあります。また，消しくずを残さないでください。

4．解答用紙を折り曲げたり，汚したりしないでください。また，マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。

5．解答用紙には，必ず受験番号と氏名を記入・マークしてください。未記入や記入・マークミスなどがあった場合は，当該科目の解答は無効になります。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

YouTube、TikTok、X（旧Twitter）、Facebook、Yahoo!ニュース……。

多くの読者は、私たちの生活の一部にもなったこれらのプラットフォームを「無料」で利用していると思う。では、何も払っていないのだろうか？

答えは〝No〟だ。確かにお金は払っていない。でも、お金と同じぐらい大切なものを払っている。アテンション（関心）や時間である。人間の脳は、自分を取り囲む情報のすべてを処理できない。ある瞬間にアテンションを向けられる対象は限定的なのだ。その意味で、YouTubeを視聴するのに、金銭と同じく有限なアテンションや時間を払っているわけである。もしこれらが、金銭と異なり、増やすことも取り戻すこともできないものだとすれば、私たちは、プラットフォームの「無料」サービスを受けるのに、(1)金銭以上に貴重な――かけがえのない――価値を犠牲にしているともいえる。

冒頭に挙げたいくつかのプラットフォーム企業は、ページビュー（閲覧数）やインプレッション（表示数）、滞在時間などのかたちで具体的に示される私たちの「アテンション」を広告主に売って、ビジネスを成立させている。このようなプラットフォーム企業のビジネスモデルは、貨幣経済と区別され、「アテンション・エコノミー（関心経済）」などと呼ばれる。インターネットの普及による情報過剰時代には、供給される膨大な情報量に対し、私たちが払えるアテンションや時間が圧倒的に希少になるため、交換財として経済的価値をもって取引される。プラットフォーム企業は、刺激的で魅惑的なコンテンツを提供することでユーザーのアテンションや時間を奪い、これを交換財として広告主に「販売」しているというわけである。

プラットフォーム企業は、ユーザーのおよそすべての行動を個人データの収集を通じて把握し、AIを使った高度なプロファイリングによりその嗜好（しこう）や思想まで推知できる。そして、こうした嗜好や思想に合致し、そのユーザーが最も反応・反射するであろう情報やコンテンツを際限なくレコメンドできるようになっているのである。また、常に身体近くにあるスマートフォンを通じて、ユーザーのアテンションを24時間体制で奪うことが可能になっている。

アメリカの法学者であるティム・ウーは、いまでは私たちのすべての時間が――かつては非商業的な時間であった友人や家族と過ごす時間さえも――激しい奪い合いの対象となっており、「私たちの毎時間、実際には毎秒が、それを支配しようという商業的アクターの標的になっている」と指摘している。また、ジャーナリストのメーガン・レイも、現在のアテンション・エコノミーの広がりにより、「パートナーとつながったり、本を読んだり、片づけようと思っていた他のことをしたりするのに使えたはずの時間」を失っていると述べている。

実際、TikTokなどのショート系動画やニュース・プラットフォームのタイムラインでは、ずっとコンテンツが流れる――終わらない――ＵＩ（ユーザー・インターフェース）が採用されている。それらはアリスが落ちた「ラビットホール（底なし沼）」のようにユーザーを釘付けにし続ける。レイは、アテンション・エコノミーの世界では、私たちは救急車のサイレンを絶えず浴びているようなものだ、とも表現する。街中を走る救急車のサイレンを無視できないように、巧妙に仕組まれたレコメンダー・システム（推薦システム）から連続して供給される刺激的で魅惑的な情報やコンテンツから自らのアテンションを逸らすことは難しい、ということだ。

「アテンション・エコノミー」なるビジネスモデルの出現は、経営学者・認知心理学者でノーベル経済学賞を受けたハーバート・サイモンが１９６０年代後半に予言していたし、人間の有限なアテンションが貨幣の代替物になるとの見通しも、既に１９９７年に、この言葉の生みの親とされる社会学者のマイケル・ゴールドハーバーによって語られていた。しかし、ＧＡＦＡＭのようなプラットフォーム企業の台頭や、人間の認知システムをも〝ハック〟しうるＡＩの加速度的発展がもたらしたアテンション・エコノミーの現代の怪物化は、彼らの予想を大きく上回るものであろう。

もちろん、このビジネスモデルが基本的人権の保障や民主主義に資するものであるならば、その怪物化はむしろ歓迎すべきものである。しかし、現実はどうもその逆のようである。例えば、国連がアテンション・エコノミーの拡大に警鐘を鳴らす文章を公表した背景にも、アテンション・エコノミーの拡大が人権や民主主義にとっての福音でなく(2)キョウホウであり、ＳＤＧｓに対しても否定的影響を与えうるビジネスモデルだとの認識がある。

例えば、現代社会を大きく動揺させている偽情報の拡散や増幅。

これも、アテンション・エコノミーと無関係ではない。このビジネスモデルの下では、ユーザーのクリックを得られるかどうかが至上命題となるため、内容のクオリティや信頼性はどうでもよくなる。そこでは、当然ながら、丹念な取材をもとに書かれた退屈な真実よりも、クリックを得られる刺激的で魅惑的な偽情報のほうが経済的利益を生むのである。２０２４年1月の能登半島地震では、インプレッションを稼ぎ広告収入を得るために海外から発信された――インプレ・ゾンビらによる――Ｘ上の偽情報が救出活動を妨げたなどと問題視されたが、これなどはまさしくアテンション・エコノミーがつくり出した悲劇的現象に他ならない。ただ、個別の偽情報を叩いても「モグラたたき」のようにまた新しい偽情報が次々と現れる。偽情報を本当に減らしたいのならば、モグラが生まれる土壌、アテンション・エコノミーなる〝構造〟を変えていかなければならないのである。

フィルターバブルやエコーチェンバーといった問題も、アテンション・エコノミーと構造的につながっている。アテンションを奪うには、そのユーザーの属性をプロファイリングし、この結果（セグメンテーション）に基づきレコメンドすることが有用であることは想像に難くない。こうした実践の結果、ユーザーは、ＡＩが「興味なし」と判定した情報やコンテンツがフィルタリングされた泡（フィルターバブル）のなかに包囲され、泡の外部に存在する公共や他者との接点を失うなどと指摘されている。また、ユーザーのアテンションを奪い続けるには、ユーザーの政治的見解と似た考えをもつ者の投稿等を積極的にレコメンドすることが有用である。結果、特定の政治的見解が〝泡〟のごとき閉鎖的空間のなかで反響（エコー）し、それ以外の見解を排斥(3)してどんどん先鋭化・過激化していくなどと指摘されている。

人間は、認知バイアスとして、繰り返し同じ情報に接触することでその情報を正しいと感じるようになるという「真実錯覚効果」をもつというが、エコーチェンバーという「反響室」ではこのバイアスが非常によく効く。実際Ｑアノンのような陰謀論者の多くは、ＳＮＳで陰謀論に何度も接触したこと――まさに陰謀論がエコーのように閉鎖的情報空間の中で反響したこと――で、これを絶対的真理と信ずるに至ったと指摘されている。こうみると、アテンション・エコノミーが作り出したエコーチェンバーは、政治的・社会的分断を加速させているだけでなく、偽情報の増幅にも加担しているということになろう。(4)「虚偽しか聞

かない者にとって、真実は存在しない」との言葉は、この状況を端的に表している。

誹謗中傷（ひぼうちゅうしょう）も、アテンション・エコノミーがつくり出している部分がある。憎悪や怒りといった表現が、人間のアテンションを得やすく、拡散・共有されやすいことはよく知られている。先述の国連文書も、「怒り（outrage）はより多くのエンゲージメントを生み出す」と述べる。フェイスブックの元社員フランシス・ホーゲンが持ち出した同社の内部文書「フェイスブック文書」によれば、同社はこうした事実を理解しながらも、ユーザーのエンゲージメント獲得のため、すなわちユーザーをFacebook上に長くとどまらせるため、こうした憎悪的な表現を優先的に表示するアルゴリズムを採用し続けたという。ホーゲンはイギリス議会の公聴会でも、議員らを前に、同社のアルゴリズムが「憎悪を増幅させていることは疑いがない」と証言した。フェイスブック誤情報チームのプロダクトマネジャーだった彼女の発言が偽証でないならば、憎悪に満ちた誹謗中傷的投稿は、プラットフォームのアルゴリズム・ＡＩに愛（め）でられ、促進されている側面がある。別言すれば、クリック＝ (5) において、深いエンゲージメント（粘着性）を作出する暴力的な過激投稿は、経済的利益を生み出すために不可欠な花形コンテンツであるといえよう。

そして、アテンション・エコノミーの下でこうした刺激物を延々と見させられる私たちの精神構造の変化にも、触れないわけにはいかない。例えば、ＥＵの欧州委員会は、２０２４年2月、デジタルサービス法（ＤＳＡ）に基づき、TikTokを運営するバイトダンスが自らの動画に対するユーザーの依存症リスクを把握し、対応しているかについて調査を行うと宣言したが、そこで重視されたのは、精神的な健康や、子どもの基本的人権であった。先に紹介したレイも、刺激物を浴び続けることによる慢性的ストレスがユーザーの健康に与える影響を指摘している。確かに、インプレッション稼ぎの過激投稿や誹謗中傷、ゴシップなど、人間の浅ましい姿を四六時中見せられて、人間の精神構造が変化しないわけはないだろう。民主主義の維持には、人間存在そのものへの信頼が必要だが、アテンション・エコノミーの加速化で、人間がどんどん人間を嫌いになっているようにも思われる。

またマイクロソフトの研究では、デジタル化の影響で、人間の注意持続時間が、集中力のないことで知られる金魚の平均的な

注意持続時間（9秒）を下回ったと報告されている。この調査によれば、モバイル革命の始まった２０００年以降、人間の平均的注意持続時間が、12秒から8秒に低下しているという。さらに、国連文書は「私たち」の「集中的な注意力」も「加速度的に短く」なっており、それが社会的・政治的問題に関するより貧しい理解につながる可能性があると指摘している。

これまでざっと見てきたように、現在の情報空間で起きているあらゆる病理現象が、アテンション・エコノミーという、プラットフォームのビジネスモデルに起因していることがわかる。国連文書やＥＵのＤＳＡ、偽情報など情報空間の現代的課題を扱う総務省の検討会（「デジタル空間における情報流通の健全性確保の在り方に関する検討会」）でも、このような認識は既に共有されている。それにもかかわらず、アテンション・エコノミーの怪物化はさらに進行しているように見える。「バズらせる」という言葉は無邪気に多用され、「クリックを得ること＝良いこと」という風潮は、既に社会文化の一部を形成しつつあるようにも思える。アテンション・エコノミーという怪物は、認知システムを刺激してドーパミンの分泌を促し、短期的には「快楽」を与えることで、私たちの心を飼い馴らし、抵抗を回避して(6)ヘンザイ化する性格を有している。TikTokのショート動画に没入したり、エコーチェンバーの中で気の合う者と連帯して他者を罵倒、攻撃したりする者にとって、怪物の作り出す世界は、酩酊の神・デュオニソスが統治する陶酔の空間であり、民主主義的世界よりもはるかに快適である。彼らにとって、(7)。怪物の外にある〝素面〟の世界は、彼らのなかでは忘れ去りたい茨の世界なのである。

この、ＡＩを手に人間の動物的・自然的側面を司る怪物との闘いは、神との闘いにも似た難しさを有している。私たち人間にとって、あるいは民主主義にとって、アテンション・エコノミーは、超強力なラスボス的な怪物であることは間違いないだろう。私たちは、「アテンション・エコノミー」という言葉を得たことで、ようやくこの怪物の尻尾を摑むことに成功したが、そのことで皮肉にも浮かび上がってきたのは、その強大さである。私たちは、あるいは民主主義社会は、いまやこの強大な怪物に飲み込まれつつある。

私たちの大切な時間やアテンションを暴食しつつ成長するこの異形を前に、ただ立ち尽くすのか、楽な戦いでないことを知りながらも対決するのか。

周知のとおり、日本国憲法は、私たちの基本的人権を保障し、民主主義を統治の基本原理としている。特に、表現の自由を保障する憲法21条は、受け手（ユーザー）が自律的・主体的にさまざまな情報を摂取できるという「知る権利」をも保障していると考えられている。民主主義の実現とともに、こうした「知る権利」の(8)ジッコウ的保障のためにも、アテンション・エコノミーの弊害を抑えた(9)健全な情報空間の実現が必要だろう。

（山本龍彦『アテンション・エコノミーのジレンマ』による）

注　Qアノン……秘密結社がアメリカ合衆国連邦政府を裏で操っているとの見方をする集団。

〔問一〕 傍線(2)(6)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(3)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

〔問三〕 傍線(1)「金銭以上に貴重な――かけがえのない――価値を犠牲にしているともいえる」とあるが、「価値」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　他者からはうかがいしれず、干渉されるべきでもない、その個人独自の政治的理念、思想の価値。
B　閲覧行動やリアクションといった表層からだけではうかがいしれない、個人の内面的嗜好の価値。
C　時は金なりという言葉通り、かねてから時間一般が有していた希少な交換財としての経済的な価値。
D　対人コミュニケーションや自分のための活動など本来略取の対象とされるべきではない営為の価値。
E　アテンションを取るという非倫理的営為に抗し、自身のアテンションを管理できる人間的尊厳の価値。

〔問四〕 傍線(4)「虚偽しか聞かない者にとって、真実は存在しない」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　虚偽の言説にとらわれていると、他者が主張する真実は主観的なものであり相対的なものに過ぎなく見えてしまう。
B　虚偽を否定する良質な言論が存在したとしても、閉鎖的空間の中にいるものには届かず、真実にはたどり着けない。
C　公共の多様な議論にふれても、どのような言説にもなんらかの虚偽は不可避である以上、絶対的真実は存在しない。
D　自身に対する懐疑を持たない以上、他者の意見を吟味すればするほど、客観的真実の存在を否定せざるをえなくなる。
E　煽情(せんじょう)的情動が虚偽を生起させているため、論理的な議論を重ねながらも主観的結論から逃れられず、真実は駆逐される。

〔問五〕 空欄(5)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　反射を奪い合う「刺激の競争」
B　賛同を奪い合う「思想の競争」
C　支持を奪い合う「政治の競争」
D　新奇性を奪い合う「拡散の競争」
E　商品価値を奪い合う「市場の競争」

〔問六〕 空欄(7)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　ファクトチェックされた報道だと認識することは、陰謀論からの覚醒を促す契機にはなりえない

B　真実を伝え、民主主義の重要性を説くような報道は、陶酔や酩酊を妨げる道徳的ノイズでしかない

C　洗脳された他者と違ってＡＩのアルゴリズムを熟知した自分たちだけが、真実の世界に陶酔し続けられる

D　酩酊に没入し続けられる空間こそが、他律的であることを承認した上で選び取ったユートピアなのである

E　民主主義こそが人間の自然的側面を表象すると鼓吹する報道は、快適な酔いを醒ます点で憎悪の対象となる

〔問七〕 傍線(9)「健全な情報空間」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　暴力的な過激表現が取り除かれることによって人間に対する信頼が回復されるよう、システムが設計された情報空間。

B　憎悪を誘引剤とするオンライン滞在が抑制され、ヘイトスピーチ等の有害情報が国家により一律取り除かれた情報空間。

C　基本的人権に基づき、情報収集と表現の自由への制御が例外なく許されない、合法的かつ多様性が保障された情報空間。

D　公序良俗に反する行為がフィルタリングされることで、子どもの精神的健康が配慮され健全な成長が担保された情報空間。

E　自分の見解とは異なるさまざまな意見にもアクセスできるよう、従来のレコメンダー・システムの弊害が改善された情報空間。

〔問八〕 次の文ア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　AIによる心理プロファイリングを通じて個人の心をハックすることは、消費行動のみならず政治行動においても、個人に行動変容をもたらしうる。

イ　これまで国民文化というフィルターバブルは人々や伝統によってつくられてきたが、今後はアルゴリズムによってデザインされたものとなることを避けられない。

ウ　注意持続時間が短くなると政治的問題に対しても感情的に反応してしまうため、政治的洗脳を回避できるよう注意持続時間を長くするアルゴリズムが必要である。

エ　経済的利益の追求がフェイクニュースの増殖を招いている以上、万人に開かれた公正且つ自由な情報の競争が必要であるが、日本ではそのことへの認知が存在していない。

オ　プラットフォーム企業が引き起こしてきた問題は国境を超えるため、言論を自由放任にするのではなく、EUのように超国家的組織による実態把握などの関与がなされている。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

フェミニストのケアの倫理研究者たちが着目する依存は、ソクラテスが言及したような、生産労働に携わることのできる健常な男性市民といった対等な者たちの間の互恵関係ではなく、他者の手だけでなく、時間を共に過ごしたり、気遣いといった心の動きまでをも要請するような、圧倒的な依存、自身の力だけでは生存すらままならないような無力な状態がまず想定されている。こうした依存状態は、誰もが経験しながらも、依存状態にある者の記憶の域を超えている。したがって、この経験は他者の経験として、その無力な状態にある依存者の、生や成長を支え促すためにケアをしている者が想像力を介して経験し、記憶するしかない。

この人間存在の原初にある依存状態は、ケアの受け手とケアの担い手との間の非対称性――体力、判断力、コミュニケーション能力といった能力においても、社会的、経済的地位においても――に特徴づけられ、そのため、依存とそれを取り巻く人間関係は、(1)不平等を特徴とする。つまり、ケアする者は、ケアされる者がいま必要としているものは何かを決め、ある意味では有無をいわさず、その生理に介入する。さらにケアする者は、ケアされる者のニーズを読み取る必要があるため、ケアされる者に寄り添い、注視し、その労力だけでなく時間をもケアされる者のために使い、ケアされる者についての知識を経験的に獲得しながら、刻々と変化する心身に時に振り回されることがある。そうした労力や時間に対して、当然のことながら、ケアされている者からそれに相応する見返りがあるわけではない。もちろん、ケアする者が主観的に、ケアされる者の反応から喜びや満足を感じることがあったにせよ、である。

人間の原初に刻まれる圧倒的な他者への依存は、そこに直接かかわる者たちを、あらゆる点において不平等な関係性のなかに置く。したがって、その関係性は、ロールズの正義論を特徴づけていた、社会的な協働関係、より公正な配分、自分にとっての善とは何かを判断できる合理性からも程遠い。それはあくまで私的な関係性であり、そこには政治や経済の領域とされる公的領域における人びとが従う行動原理とは(2)異なる行動原理が存在しているように見える。その原理とは、一般的には愛情と呼ばれる。

それは、権利義務関係とは異なる、政治的領域の外でわたしたちが育んできたような、自然に育まれた感情の在り方として理解されてきたものであろう。

しかし、ケアの倫理は、愛という言葉で理解されてきた、あるいは美化され自然視されてきたものではない行動原理をそこに見いだそうとする。それは、不平等な依存関係ゆえに、ケアされる者がケアする者の対応に左右されてしまうことから生じる、傷つけられやすさへの着目から生まれた原理、責任の原理である。人間にとっての依存という普遍的事実は、人間が他の動物に比べても未熟な状態で生まれてくるという、否定しえない生物学的な条件であると同時に、人間社会や文化の在りようも加わり、一人ではその生を維持できない期間が長いという社会的条件でもある。依存は、人間個体の状況を表す記述的な概念である――したがって、その状態自体には、良いも悪いもない――ものの、自立した存在こそが社会人であるという想定が強いために、人生のほんの一時期の状態であるとされ、(3)社会的に周辺化されがちである。つまり、依存状態からいつかは自立した存在となることが期待されている。その延長線上で、病気や事故などだけでなく、障がいや老衰といった事象もまた、例外的なものとして扱われてしまう。

他方で、脆弱性（ぜいじゃく）は、ヴァルネラビリティ（ヴァルネラビリティ）という英語にも表れているように、他者に傷つけられやすい、攻撃に晒（さらし）されやすいという可能性と、他者関係のなかに置かれた状態を指す。すなわち、依存状態にある人間は、他者からのケアを当てにしなければならず、他者の能力に頼（ディペンド）るがゆえに、他者のふるまいや態度にその生存は左右される。したがって、他者に依存する者の被傷性（ヴァルネラビリティ）は高まるのである。しかし、脆弱性という概念は、依存が一時的なある段階における人間の在りようを含意するのとは異なり、自らのコントロールの及ばない他者の行為や環境に左右される状態を意味するがゆえに、つねに傷つけられやすいという常態をさす。すなわち、脆弱性は他者のケアによってのみ生存や身体の安全が保たれている事態にのみ内在するのではなく、じっさいには身体とともに生きるあらゆる人間にとっての、否定しえない事実である。したがってファインマンによれば、脆弱性とは、身体と共に生きるわたしたち人間の特徴の一つなのだ。一方でそうした脆弱性は、危害や損傷を被る、あるいは運の悪さといった可能性にわたしたちがつねに開かれていることであり、他方で、身体的に被る危害は、多様な形態があり、不快や迷

惑といったものから、破壊的でとりかえしのつかないものまで幅があるという。

依存状態が、ケアする者とケアされる者との二者関係にわたしたちの目を向けがちであるのに対して、その関係性に内包される脆弱性は、わたしたち人間が、予測不可能な物質的環境につねに左右されている事実に気づかせてくれるだけではない。脆弱性に気づくということは、人間の知恵と努力によって、人間の被傷性の程度を緩和したり、避ける可能性を高めたりすることができたとしても、人間社会は被傷性を根こそぎにはできないという事実にも気づかせてくれるのだ。

こうして、依存という事実から、ひとが身体性を備えつつ、ある環境や他者との関係のなかで生きているがゆえに、つねに脆弱であること、すなわち攻撃を受けやすい、あるいは環境のなかで心身を傷つけられる可能性があることにわたしたちは気づかされる。依存の事実と異なり、脆弱性はあくまで可能性であり、その可能性は根こそぎにできない一方で、じっさいの危害に至らないように、環境を整えたり、じっさいに危害にあったとしてもそこでの傷を和らげるよう努めたりすることは十分可能なのだ。さらに、ファインマンやキティが二次的依存という、ケア提供者が陥る依存に強い警鐘を鳴らしてきたのは、二次的依存に陥るがゆえに、経済的剥奪だけでなく、孤立した状態で物理的暴力を受けたり、社会福祉へのアクセスが閉ざされ、脆弱性からじっさいの危害に至ったりする可能性が高まるからであった。したがって、脆弱性は誰しもが避けられない人間条件であるとはいえ、じっさいの危険に陥る可能性は、そのひとが置かれた人間関係や社会的・制度的なしくみによって軽減したり、増大したりする。この脆弱性への注目こそが、ケアの倫理を社会構想へと導いていくのである。

（岡野八代『ケアの倫理』による）

注　フェミニスト……女性の立場から政治的・経済的・個人的・社会的な面におけるジェンダーの平等の確立を目指す人たち。
ロールズ……アメリカの哲学者（一九二一～二〇〇二）。　ファインマン……アメリカの法学者（一九四三～）。
キティ……アメリカの哲学者（一九四六～）。

〔問一〕 傍線(1)「不平等」とあるが、それはどういうことを指すか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　無力な状態にあるケアされる者は、常に誰かの助けを必要とするが、ケアする者は、自分のための時間をもケアされる者のために使わなければならず、ケアに対する見返りが得られないということ。

B　ケアされる者は、自分の必要としているものを適切に伝達することが難しい場合があり、ケアする者の一方的な知識や判断だけが優先されて、要求を満たしてもらうことができないということ。

C　ケアされる者は、ケアする者から身体的なものだけでなく気遣いなどの精神的なケアを得ることができるが、ケアする者にはケアされる者からの反応によって得られる喜びしか見返りがないということ。

D　ケアする者は、ケアされる者に多くの時間や労力を割いて寄り添おうとするが、ケアされる者はそのような経験を記憶することができず、ケアする者の献身が評価されることはないということ。

E　ケアする者には経済的な安定性があり、社会的地位も維持できるが、ケアされる者は、単独では生存すらままならない無力な状態であり、ケアする者の支援に依存するしかないということ。

〔問二〕 傍線(2)「異なる行動原理」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　身近にケアを必要とする者があれば、それが困難なことであっても、自然とケアをせずにはいられないという考えに基づく行動のあり方。

B　社会的な公正性によって、誰でもケアが必要な者には、社会が十分な生活を保証しなければならないという考えに基づく行動のあり方。

C　ケアの経験が、社会的な協働性の意識を自然と高め、より生きやすい社会を実現することにつながるという考えに基づく行動のあり方。

D　ケアを必要とする者の気持ちに寄り添い、公的サービスでなく家族が愛情をもってケアすべきだという考えに基づく行動のあり方。

E　ケアを必要とするものの自立を支援することで、生産活動への参加を促すことは合理的であるという考えに基づく行動のあり方。

〔問三〕 傍線(3)「社会的に周辺化されがちである」とあるが、なぜか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　他者への依存は、個人の自立した判断を危うくするため、社会人として負うべき責任を果たせないことが多いから。

B　他者への依存は、病気などの例外的な理由でない限りは、自立した社会人としては評価することができないから。

C　他者への依存は、社会人として恥ずべき状態として隠されやすく、その実態が社会において可視化されにくいから。

D　他者への依存は、幼い子どもと同等の未熟な状態であり、責任をもって社会を担える存在とはなれていないから。

E　他者への依存は、一時的な状態であって、個人として自立的な存在であることが標準的であるとされているから。

〔問四〕本文の内容に合致するものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　被傷性に晒された脆弱性をもつ人もいるという事実を認識し、ケアを必要とする人びとへの想像力をもつことによって、危害を和らげることが可能である。

B　依存状態にある人間の被傷性は高く、予測不可能な物質的環境に左右されやすいが、社会的・制度的なしくみを構想することによってその可能性はなくすことができる。

C　ケアする者のケアされる者へ依存だけでなく、ケア提供者が陥る二次的依存の問題もあるため、依存状態から離れて生きることのできる制度を構想する必要がある。

D　人間は常に傷つけられやすい脆弱性をもつ存在であるが、そのような人間観に立脚した社会制度を構想することによってその危険を軽減することが可能である。

E　人間は他者への依存をすることなしには生きることのできない存在であるということは否定し得ない事実であり、その被傷性も受け入れる覚悟が必要である。

三　次の文章は、『源氏物語』で光源氏が末摘花の姫君邸へ訪問する話を別の趣向で描いた後世の作品、『別本 八重葎』の一節である。光源氏が須磨に退去し訪れが途絶えた後も、姫君は荒廃してゆく邸で古参の女房たちと暮らしている。月夜の晩、ある一行が邸宅に近づいてくる。これを読んで後の問に答えなさい。（30点）

ただこの南面にさし寄せて、声づくるなれば、覗きみるに、狩衣姿の見知れるやうなるは、大夫なりけり。思ほえずめづらしきにも、古りぬる人は、いとど一つ涙ぞとどめがたかりける。咳がちにて、「あな嬉し。捨つ［(1)］ける命かな。あが君のかくておはしますを、この世に待ちつけたてまつらむとやは思ひつる。夢にやあらむ。さりともしばし覚めでをあれよ」など、ものぐるはしげに言ひしろふを、侍従も聞きつけて、こなたに出できたり。御前などもありしながらなるを、「あやしう、さても、いつばかりか都には帰らせおはしましつる。かう人疎き葎の門にのみ閉ぢられてはべれば、(2)さる御響きも承りはべらぬに、かくておはしますを見たてまつるにも、猶うつつとはおぼえはべらず」とてうち泣く。

御車は少し退きて蓬の露乱りがはしきに立てたり。大夫ぞ簀子に尻かけて語らふ。「この一昨日にぞ、朝廷の御許し蒙らせたまひつる。(3)昼などは猶つつましうおぼし召したれば、かく夜深うふりはへおはしますなり。(4)らうがはしからぬ御座所設けさせたまへ。姫君などか出でさせたまはぬ」と言ふに、「げに、埋もれいたきもいかが」とて、(5)入り来てそそのかし聞こゆれど、宵より物の怪起こりたまふやうにて、なやましきに、さらに(6)人の気配もむつかしとて、うちも身じろきたまはねば、とかくしあつかふほどに、大夫うちむつかりて、「かく訪ひおはしましつるを、いかがは。姫君の御気配聞かせたまはぬほどは、さらに御車よりもさし出でさせたまふ［(7)］なむ」と言ふに、老御たちども、「いで、憎の御心や。かうありがたき御心ざしを見る見る、(8)ただにやは帰したてまつりたまふべき。つひに身の御幸ひ待ち出でたまふ［(9)］御ひがひがしさかな」など、まがまがしう言ひ嘆く。侍従などの入り来て、言ひあつかふをも、「あなかま」とて聞き入れたまはねば、「物の憑きたてまつりて、ひたぶる言を言はせたてまつるなめり」と、あきれたる心地す。

とかくやすらふほどに、(10)「夜明けはべりぬべし。はしたなくなりては便なきわざなるを、明日の夜さりこそまうでたまはめ」

とて、御車にもさやうにとり申せば、「いかがはせむ。めづらしき御心ざしを、燻(ふす)べ顔ならむも、やがて絶え果てたまひぬべきにや」と、(11)あやふくて、侍従なども思ひ乱れたり。雨そほ降るに、御車の音して出でたまひぬれば、老人どもはものも覚えず、外(と)ながら帰したてまつるいとほしさを言ひ合はせつつ、姫君をあはめ憎みて、泣きぬべく腹立ち騒ぐ。

（『別本　八重葎』による）

注　大夫……光源氏の乳母子(めのとご)で従者の惟光(これみつ)。　古りぬる人……年配の女房。　一つ涙……悲喜こもごもの涙。
あが君……光源氏。　侍従……姫君の乳母子で女房。　御前……前駆(せんぐ)の者。　葎の門……荒廃した邸宅。
簀子……板廂(びさし)の外の濡れ縁。　老御たちども……「古りぬる人」に同じ。

〔問一〕　空欄(1)(7)(9)に入る助動詞「まじ」の活用形の組み合わせとして正しいものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　(1)まじ　(7)まじく　(9)まじき
B　(1)まじかり　(7)まじけれ　(9)まじかる
C　(1)まじ　(7)まじから　(9)まじかる
D　(1)まじかり　(7)まじく　(9)まじき
E　(1)まじ　(7)まじかり　(9)まじく

〔問二〕 傍線(2)(4)(6)(10)の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(2) さる御響き

A 光源氏が今晩おいでになるというお知らせ
B 光源氏が帰京なさっているというおうわさ
C 一行がこちらに向かっていらっしゃる声や音
D こちらにいらっしゃる一行の光り輝くご様子

(4) らうがはしからぬ

A 目につかない
B 窮屈ではない
C 乱雑ではない
D 派手ではない

(6) 人の気配もむつかし

A 来客の居そうな様子もうっとうしい
B 物の怪が取りついた人の有様も気味悪い
C 女房たちが近くに居るかどうかもわからない
D 物の怪が取りついた人かどうかも判断できない

(10) やすらふほどに

A 姫君を待ちかねるうちに
B のんびりと寛いでいる間に
C やりとりを重ねている間に
D ぐずぐずしているうちに

〔問三〕 傍線(3)「昼などは猶つつましうおぼし召したれば」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　帰京を赦(ゆる)したとはいえ、さすがに昼間に光源氏が外出するのは不謹慎だと、帝がお思いになっている。

B　帰京を赦したとはいえ、光源氏の昼間の参内はやはり控えた方がよいと、帝がお思いになっている。

C　朝廷から赦されたからといって、やはり昼間に自由に出歩くのは憚りがあると、光源氏がお思いになっている。

D　赦しを得て帰京したからといって、やはり昼間の外出は秘密にせねばならぬと、光源氏がお思いになっている。

E　朝廷から赦されたとはいえ、やはり昼間に自分のもとを訪ねられるのは気が引けると、姫君がお思いになっている。

〔問四〕 傍線(5)「入り来てそそのかし聞こゆれど」、(8)「ただにやは帰したてまつりたまふ」の主語をそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

A　光源氏　　B　大夫　　C　女房たち　　D　姫君

〔問五〕 傍線⑾「あやふくて」と侍従らが思ったのはなぜか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　光源氏がせっかく訪れてくれたのに、姫君は病で苦しそうだったので、ひょっとしてそのまま死んでしまうのではないかと思ったから。

B　姫君がせっかく好意を向けたのに対して、光源氏が不機嫌な態度を取っていたので、そのままもう訪れなくなってしまうのではないかと思ったから。

C　姫君がせっかく好意を向けても、待たされて不機嫌な光源氏がそのまま帰ってしまったら、姫君は恥ずかしさで死んでしまうのではないかと思ったから。

D　光源氏がせっかく訪れてくれたのに、姫君が恥ずかしがって待たせてしまったら、そのまま光源氏は帰ってしまうのではないかと思ったから。

E　光源氏のせっかくの好意に対して、姫君がすねた態度を取っていたら、そのまま光源氏は訪れなくなってしまうのではないかと思ったから。

〔問六〕 本文中の女房たちの心情をあらわす語としてふさわしくないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A　感激　　B　賞賛　　C　歓喜　　D　焦燥　　E　慨嘆　　F　不安